



東京ミッション研究所ニュース

第 87 号
2018 年 12 月発行

〒189-8512 東京都東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内
TEL/FAX 042-396-5597 郵便振替 00150-5-29091
Email アドレス tokyomissionri@gmail.com



TMRI の情熱と行動 (Passion&Action)

東條隆進 弥生台キリスト教会牧師、早稲田大学名誉教授、
日本宣教会理事、東京ミッション研究所所長

デイヴィッド・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』は世界の宣教の歴史に深刻な影響を与えている。特に日本宣教の在り方に深刻な影響を与えている。宣教の在り方に根本的な反省を求めている。

ボッシュは宣教の聖書学的基礎をマタイ福音書、ルカ使徒言行録、パウロにおける宣教に求めている。マタイ(弟子作りとしての宣教)、ルカ(赦しの実践と貧しい者との連帯)、パウロ(終末論的共同体への招き)のパラダイムに加え、歴史における三つの宣教パラダイムを挙げた。1) 東方教会、2) 中世ローマ・カトリック、3) プロテスタント宗教改革における宣教パラダイムである。

今、「パウロにおける宣教—終末論的共同体への招きとしての宣教のパラダイム」が決定的に重要になって来ている。

パウロはコリントへの手紙で次のように述べた。「わたしはだれに対しても自由なものですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対してはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。…律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人ようになりました。律法に支配されている人を得るためです。……弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とか

して何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」

続けてパウロは次のように述べた。「競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するので、だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。…それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」(I コリント 9:19-27)。

パウロはギリシャ文明の基礎をなすオリンピックという競技の中でのみ使用する「アゴニゾマイ」という言葉を使った。英語圏で「アゴニー」という語の語源である。the Agony は「受難前のキリストの苦しみ」という語である。

パウロにとって宣教とは神の国を建設するオリンピック・マラソンを走ることであった。しかも「他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になって」しまう恐怖に責め苛まれながら走ったのである。しかもこのマラソンの伴走者は十字架を担われたキリストである。

日本語聖書はアゴニゾマイを「競争」と訳してはいけない。キリストにある仲間と「十字架の共走」という語のみが聖書的意味をもつ。キリストにある宣教は絶対に天皇制に陥ってはならない。権威なき権威主義に陥ってはならない。心すべきである。

2018年6月25日~27日 夏季学校より

「ジョン・ウエスレーの魅力に近づく」(ウエスレー

—神学の核心・セッション1より) 講師: ケネス・コリンズ*

今回は、「ウエスレー神学の核心—変革をもたらすホーリネスの恵み」と題して7回の講義が語られました。その講義は、ウエスレー研究の第一人者だからこそ語れる、内容の濃いものでした。ここでは、ジョン・ウエスレーをその側面から紹介しつつ、その魅力に迫る初回のレクチャーの内容をまとめました(YN)。

◇ジョン・ウエスレーを愛する ようになる10項目

今回のレクチャーでは、まずなぜジョン・ウエスレーが愛されているのか、その理由を取り上げたいと思います。

① 平等主義的精神を持っていた

ウエスレーが愛される最初の理由は、人間理解の豊かさにあります。「神のイメージ」、「神の似姿」、すなわち *imago dei* において人間が創造されたことを大切にしました。同時にキリスト教信仰の普遍的な側面、すなわち、福音がすべての人に開かれ、その良き知らせは、すべての人間をその根本から創り変え、創造者なる主に仕えることが出来るようになるという、ダイナミックで深い人間理解が私たちを魅了します。聖書には次のようにあります。「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」(ガラテヤ 3:28) 神のイメージに人間が創造されたということに基盤をもつ人間理解、福音理解は、人間の男女の尊厳を肯定し、あらゆる形態の民族中心主義を

克服するものです。

こうした神学的な土壌は、メソジスト運動の中で、男性も女性も指導者として、教師や組会のリーダー、また説教者としても用いられたこと、また裕福な者や貧しい者の課題にも具体的に取り組んでいったこととも関係しています。このような実践は、ある者たちにとっては衝撃的なことでした。具体的な実践や組織の形態にもみられる平等主義的精神の根本にこのウエスレーの人間理解があったことは、大切ですし、歓迎されてきました。

② 真の腹思想家だった

ウエスレーは、霊操書の古典である御復活のラウレンシオ『神の臨在の実践』の愛読者だけでなく、この書の実質的部分を、自身の『キリスト教文庫』に加えています。「時間を贖う」と自ら表現したウエスレーの問題意識は、ある意味では英国教会の司祭ジェレミー・テイラーから受け継いだものでした。それは、日曜日以外の仕事日であっても、神の臨在を意識しつつ、その現実世界を歩むのです。端的に言えば、日常の背後には永遠がある、ということなのです。

③ 貧しい者を愛し、気前が良かった

ウエスレーは、その長い生涯の間中ずっと、文字通り何千ポンドも稼いだのであり、それはほとんどの基準において(また彼自身の基準においても)富める者となるのに十分なものでした。興味深いことに、彼が天に召されて残った財産は、僅かにティーポット一つと数ポンドだけでした。それは、得たもののほとんどは貧しい人々のために捧げられたことを意味しています。

さらに、「貧しい人々を訪問する」ことの重要性を訴えました。そして、貧しい人がお金を借りるための制度を作ったり、診療所を作ったりもしました。貧しい人への彼の働きは、魂にも肉体にもバランスよく関わったのです。

* アズベリー神学校、プリンストン神学校、ドゥルー大学(Ph.D.)で学び、現在は、アズベリー神学校で教鞭をとる、ウエスレー神学の第一人者。著作に、*John Wesley: A Theological Journey*, (Abingdon Press, 2003), *The Theology of John Wesley* (Abingdon, 2007), *The Works of John Wesley* (Abingdon, 2013)等がある。

④ 「霊」の現実性を肯定した

18世紀の英国は、理性が強調され、中庸であると判断されるものが重要視されていました。英国教会の司祭の中にさえ、「霊」の現実性を疑う者たちがいたのです。そのような時代、ウエスレーは「熱狂者」ないし「狂信者」と評されていました。使徒パウロが述べている、「御霊」が私たちの霊と共に私たちが神の子たちであることを証しするということは、理解されることも、受け入れられることもありませんでした。

しかし、ウエスレーは、天使や悪霊、悪魔、そしてあらゆる霊的存在の中で最も偉大なる神の存在を—さらには、目に見えないその他もろもろのものも—肯定していました。ウエスレーは、現実的な意味において、ホモ・サピエンスをホモ・スピリトゥアリスと見なし、人間を霊的存在として認識していたのです。

⑤ 安価な恵みを拒絶した

ウエスレーは、後にボンヘッフアーが主張したように、「安価な恵み」を拒絶しました。福音を見せびらかしながら、罪人の鎖を磨き上げ、彼らを隷属の内に放置しておいて「善い行いをせよ」と言うような聖職者に対して厳しくありました。福音を伝える働きは、罪人を縛る鎖を磨き上げるのではなく、それを断ち切ることだと主張したのです。

ウエスレーは自由を語りましたが、それは、世が語るような自由ではありませんでした。罪人が救われ義とされた後、その人を罪の奴隷のまま放置するような自由を否定しました。囚われ人が解放され、御霊によって生きる真の自由を告知したのです。神と隣人を愛するキリスト者は、最も自由とされた存在です。それは、愛する自由を与えられたということなのです。

⑥ 人々のために平易な真理を説いた

ウエスレーが生きていた18世紀の世界は、ある意味では今日にも似ています。演説者また著作家の中には、複雑な言い回しや、難解な哲学者たちへのわざとらしい言及を採用したり、あらゆる種類の外国語表現を散りばめることによって学識をひけらかし、自分がどれほど頭が良いかを示そうとする者たちがいました。しかし、ウエスレー

は平易な真理を人々のために分かりやすく語りました。最も小さい者である貧しい人たちに届くことを誠実に望んでいたのです。

ウエスレーの聴衆は、「理解ができない」ことに悩まされたのではなく、むしろ「理解したがゆえに」悩まされました。

⑦ 福音を広めることに勤勉であった

ウエスレー以上に自らの働きに熱心だった福音宣教者を見出すことは困難です。彼は全生涯でたった二度しか休暇を取らなかったほどに、福音のために勤勉に働きました。妻に対して、「結婚しても、ひとつでも説教の回数を減らすことも、旅の1マイルを減らすこともしない」(Ward and Heitzenrater, *Journals and Diaries*, 20:378, note #51.) と述べたほどです。ただ、このことは、結婚した後ではなく、その前に伝えるべきことだったでしょう。

この英国人指導者は、毎朝4時に起床し、長いキャリアにおいてごく僅かしか休暇を取らず、引退の年をはるかに過ぎてまで働き続けました。彼自身の言葉を使えば「時間を贖った」といえるでしょう。

⑧ 繊細な人物だった

このメソジズムの父は、人間の心の深いところを理解することのできた繊細な人でした。彼は理性においてだけでなく、心における割り切ることのできない複雑な経験を大切にしました。私たちは、そのすべてをもって礼拝するからです。さらにウエスレーは、意思についても、宗教的感情という面においても、深い洞察をもっていました。

⑨ 社会的、政治的関心をもっていた

ウエスレーは社会的なことにも、政治的なことにも深い関心を寄せていました。あるところでウエスレーは、「キリスト教は社会的な宗教であり、それが内にこもるような形にするならば、その本質を破壊してしまう」と書いています。彼は、貧しい人を救済するために、政治的な文書を複数書いています。「現在の援助の不足についての考え」と題する文書などが挙げられます。

18世紀英国の富裕層の間に広まっていたある偽りの確信についても、批判しています。それは、

「彼らが貧しいのは、彼らが怠け者だからだ」というものです。富める者たちは、自分たちの取り分以上に社会の財を得ており、それによって多くの者たちを貧困と欠乏に置き去りにしている、とウエスレーは確信していました。ですから、キリスト者は貧しい人々への重い責任を担っているのだと考えました。このあたりのごことは、ウエスレーの「お金の使い方について」という文書によく表わされています。

その中では、お金に関わる、三つの原則が語られています。第1に、「勤勉に働き、しっかり稼ぐこと」、第2は「出来る限り蓄えなさい」でした。蓄えるということは、不必要な出費をしない、ということでもありました。そして第3は、「可能な限り貧しい者に施しなさい」ということでした。

⑩ 心のすべてをもって神を愛し、隣人を自分自身のように愛した

最後に、神を全身全霊をもって愛しました。ある人々は、「ウエスレーは自分が聖化されたことを自ら話さなかった」と言います。こうした発言は、奇妙なものだと思っています。もちろん、ウエスレーは、自分のことを指さして「ほら私を見なさい。私はこんなにもきよくされています」とは言いませんでした。しかし、ウエスレーが1791年3月、彼の人生の最期の時のことを思い浮かべていただきたい。彼の周りを取り囲んでいた人々に、彼はアイザック・ワッツの作曲した讃美歌を引用してこう述べました。「息のある限り、私は私の創り主をほめたたえよう」。このことは、ウエスレーが死の前に全き平安の中で、信仰の確証をもって神の前にあったことを示しています。ここに、死の床において、顔と顔を合わせて神の前に出る備えができていたことを見ることができるのです。

◇包括的で接続的なウエスレー

福音は、今まで語られた物語の中で、最も素晴らしいもので、世界のどこにも見出すことのできないものです。神ご自身は自らへりくだり、人間となり、しかも十字架刑に処せられる罪人になられたのです。さらに、私たちを罪から救い出し、神の前に全きものに変えて下さるという驚くべきことをなさいました。このことをウエスレーは余すことなく語りました。

ウエスレーを紹介するにあたって、この包括性は重要です。彼は、実にバランスのとれた神学者であり、その思索のスタイルにある特徴がみられます。そのことに目を向けましょう。今まで、ウエスレー研究者の間でも、ウエスレーの全体像を捉えきれませんでした。ですから、いわばヘリコプターの視点で見たいと思います。

① バランスのとれた神学者

ウエスレーは、何より巡回伝道者でした。彼は馬の背に乗りながら読書した(そして数回落馬した、と言っても彼の像は台座から落ちたことはない)と言われるほどです。アウトラーは、ウエスレーは神学の巨人ではなかったと述べています。彼は、民衆の神学者であって、人々に分かるように語った神学者だったのです。

ウエスレーの神学は、神から世に派遣された教会の実際的なことに深く関係するものでした。それは包括的で、バランスの取れたものだと言われています。彼の神学は、神の働きに参与していくという意味で実践的で、私たちの存在すべてに関わるものであって、単なる知的営みで終わるようなものではありませんでした。それは、私たちが個人としても社会としても変化に対して開かれたものだということを意味しています。その神学は、救済論に焦点を当て、聖書に基づくもので、教会の宣教へと方向付けられ、聖書の真理を人々の生活の現実へと届け、社会的に貧しい人々へと開かれていたのです。アウトラーによれば、ペラギウスの楽観主義とアウグスティヌスの悲観主義に対して第三の道を提示したと述べたほどです。

ウエスレー解釈者の中には、ウエスレーを特定の教派的伝統と結び付けようとする人々がいます。20世紀の初頭、クロフト・セル(George Croft Cell)は、ウエスレーをカルバン主義の中に位置付けました。ヒルデブランド(Franz Hildebrandt)は、ルター派敬虔主義の伝統を見出し、ラップ(Gordon Rupp)は、ピューリタンの影響を見ており、マードックス(Randy Maddox)は、東方教会の教父たちから強く影響を受けていると考えました。しかし、一つに絞ることは決して出来ません。もし選ぶとしたら、英国国教会と言えるかもしれませんが、そうだとすると、その伝統の中で、全く新しいことをしたのです。

② 「接続的」な神学者

今までのことをまとめると、ウエスレーは様々な伝統の影響が彼の内に響き合っていると考えることが出来ます。アウトラー(Albert Outler)は、これを「接続的(conjunctive)」な神学者だったと表現しています。それは、「あれかこれか」ではなく、「あれもこれも」ということでしょう。

具体的には、ルターのように「信仰のみによって救われる」ということを強調し、同時にローマ・カトリックのように「聖なる生活」を強調しました。また、「律法」と「福音」、「恵み」と「行い」を強調しました。「恵み」とそこに生きる「力」の両方を、「義認」と「聖化」を、「瞬時性」と「暫時性」を、さらに「福音の普遍性」も「その限定的な実現」をも強調したのです。

ウエスレーは、厳密な意味での組織神学者ではないと言われますが、その時代の中で神学的方向付けをしながら、いくつかの重要な神学的テーマを巡って展開していく神学者でした。アウトラーは、「恵み」がウエスレーの神学全体の枢軸的テーマであると言っています。また、マードックスは、「応答的な恵み」が主要なテーマだと述べています。しかし、ウエスレーの神学を総合的に見るなら、これらの一つ一つは、一部分であって、「接続的な」神学の性質を捉えきれていないと言えます。

さて、接続的である彼の神学から、二つの鍵の言葉が響いてまいります。それは、「ホーリネスと恵み」(holiness and grace)です。これら二つのテーマを見る場合も、それがどのように他のテーマと関わり合うのかを捉えていくことが求められます。「ホーリネス」であるなら、それは、「愛」と繋げる中で「holy love／聖なる愛」として捉えていきます。従って、holy とは何を意味するか、と問うならば、それは聖なる愛(holy love)を意味しています。もしも、「愛」抜きに聖を語るなら、それは誤解を生むこととなります。人間の宗教性に陥り、「～してはならない」「～をすべきである」といった沢山の項目で構成される「聖」となります。逆に、聖さを抜きに愛を語るなら、土着文化を賛美し、自己中心を助長し、個人や集団の思いや嗜好に偏り、「聖なる愛」から離れてしまいます。だからこそ、両方を接続することが重要なのです。

教会を捉えることにおいても、この「接続的」ということが大切です。教会は、世から分離された

存在です。しかし、それで終わりません。世から分かれたただけではなく、同時にそこへと遣わされています。この教会において、愛抜きの聖を語らないで下さい。そして、聖抜きの愛を語らないで下さい。この愛こそが、あのカルバリで表わされたものなのです。

「恵み」も、接続的に理解される必要があります。恵みにおいて、私たちの「応答」は大切です。恵みに応答して行動する際、恵みから分離されてはなりません。しかし、「応答」だけを強調するのは問題です。もう一方は、free grace(無償の恵み)です。応答する前に、神から受け取る恵みです。これは完全な意味で「賜物・ギフト」であり、ただ受け取る以外に私たちには何もできません。アメリカのウエスレー神学の理解がこの部分を見失う傾向があったことは、残念なことでした。

無償の恵みは、神にしか付与できません。それに対して、応答する恵みは、恵みに対する応答という側面を意味しています。両者は決して離してはならないのです。

THE AXIAL THEME OF WESLEY'S THEOLOGY(CONT) ウエスレーの神学の枢軸的テーマ(承前)

Holiness 聖	Grace 恵み
Holy/Love 聖／愛	Free/Co-operant (Responsible) 自由(無償)/共働的 (応答的)

◇まとめ

ウエスレー神学をまとめるなら、次の二つの枢軸的テーマで表現することができます。それらは、「ホーリネス」と「恵み」で、両者を接続することで正しく捉えることができます(図参照)。さらに、それぞれは「聖なる愛」「共働の恵みと無償の恵み」という対に広がっています。これらを総合的に捉えることが、ウエスレー神学を捉えることであり、そのことは、神学と実践、救いとその後の生活を統合し、さらには、多様な伝統をも貫くエキュメニカルな広がりをもつウエスレーの魅力へと繋がっていきます。

TMRIからのお知らせ

◇夏季学校の報告

去る6月25日(月)～27日(水)に、「ウエスレー神学の核心—変革をもたらすホーリネスの恵み」と題して夏季学校が開催されました。今回は、ウエスレー神学の第一人者、ケネス・コリンズ氏を講師に迎え、学問的にも、信仰的にも、刺激と恵みに満ちた学びの時となりました。今回の所報では、その一部を紹介しています。また、アズベリー神学校のアジアの神学教育支援への基金からの援助があり、心から感謝いたします。

◇冬季フォーラムのお知らせ

来る2019年2月25日(月)午後2時半よりお茶の水クリスチャンセンターにて「キリスト者の証言一人の言語化の営みから宣教を考える」と題してフォーラムが開かれます。講師に、原敬子氏

(広島大学大学院修士課程修了、Institut Catholique de Paris, L'Institut Supérieur de Pastorale Catéchétique, STL 取得、上智大学大学院神学研究科博士号取得)をお招きしています。昨年、教文館から『キリスト者の証言一人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』を出版され、リクールの言語哲学の視座から、極めて重要な人間の言語活動の根本に光をあてる本を出版し、日本宣教会の全国研究会でも発表されました。ご期待下さい。

献金者名

2018. 3. 12～2018. 11. 20 敬称略

◇団体：新井キリスト教会、鹿児島武キリスト教会、川越のぞみ教会、O.M.S.

◇個人：東條隆進、水間照弥、飯島庸江、三木勝喜、小関謙治、西岡行雄、西岡義行、金本史子、中川美弥子

※貴い献金を心から感謝いたします。

◇◇◇◇◇◇ 東京ミッション研究所からの書籍案内 ◇◇◇◇◇◇

- 1 『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』 ロバート・リー編 新教出版社 1700→1400 円
 - 2 『これからの日本の宣教—発想の大転換』 TMRI 編 いのちのことば社 2200→1500 円
 - 3 『宣教のパラダイム転換上・聖書の時代から宗教改革まで』 D. ボッシュ著 7035→6000 円
 - 4 『宣教のパラダイム転換下・啓蒙主義から21世紀に向けて』 D. ボッシュ著 7875→7000 円
TMRI 訳 新教出版社 (上下一括割引 14910→12500 円)
 - 5 『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を超えて』 ロバート・リー著 TMRI 訳 2940→2400 円
 - 6 『<聖>をめざす旅』 アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3150→2500 円
 - 7 『社会を動かす礼拝共同体』 J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 2940→2300 円
 - 8 『愛する者が襲われたら』 J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1500 円
 - 9 『赦し—新しい人間関係を生み出す』D.アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 1700 円
 - 10 『イエスの平和を生きる—激動の時代に読む山上の説教』 グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700 円
 - 11 『平和の契約—福音の聖書神学的理解』 ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所訳 いのちのことば社 特別価格 7140→5000 円 (まとめて買うとさらに割引が可能です。)
 - 12 『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』ジョン・ポール・レデラック著(水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行)東京ミッション研究所/ヨベル社 1050 円 → 800 円
 - 13 『ジョン・H・ヨーダーの神学—平和をつくり出す小羊の戦い』ヨーダー研究会(中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション)東京ミッション研究所/新教出版社 1950 円→1700 円
 - 14 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』クリストファー・J・H・ライト著 TMRI 訳 いのちのことば社
 - 15 『イエスの足跡に従う—アナバプテストの伝統』A.スナイダー著 中川美弥子訳 ↑1～3 巻
矢口以文共訳/東條隆進監修、東京ミッション研究所 2000 円
- ※ 『ケープタウン決意表明』日本ローザンヌ委員会訳、いのちのことば社 945 円
本書は、日本ローザンヌ委員会からの出版ですが、TMRI でも取り扱っています。